邪神無双
～邪神が黒い笑顔で人助けを始めたようです～
九頭七尾
イラスト 武藤此史
「試し読み版」
ツギクルブックス

レイジ
女神殺しによって手に入れた神の力と、転生前から持っているスキル「死者蘇生」を使って、レベル上げを行う転生者。
スラぽん
大きさを自由に変えられるスライム。何でも吸収してしまうのが特徴。
アンジュリーネ
上級冒険者の称号を持つアマゾネス。戦いを挑んで負けると、その男に強烈に惹かれてしまう性格。
ルノア
「悪魔公爵の娘」の称号を持つハーフデーモン。自分のせいで母親が死んだと思い込んでいる。

主な登場人物

ファン

ケモミミが特徴の犬人族。戦闘スキルに優れているが、自分よりも力の強い者に服従しやすい。

ニーナ

元奴隷のドワーフ族。見た目が幼く、常に妹キャラとして見られてしまう。

プロローグ

「じょ、冗談だろ……？」
「こんなの、どうしろってんだよ……」
刻一刻と迫りくる絶望を前にして、屈強な冒険者たちが弱気な声を漏らしていた。
街の南側に広がる草原地帯。
普段は比較的穏やかな一帯だが、今は、とある凶悪な集団によって埋め尽くされていた。
豚、豚、豚、豚、豚、豚、豚、豚、豚、豚、豚、豚、豚、豚、豚、豚、豚……。
――豚の大群。
正確に言うならば、それは豚の頭部を持つ魔物、オークだった。
この辺りではポピュラーな魔物で、ある程度の力を持つ冒険者であれば、まず討伐した経験を有しているだろう。
それ故、その弱点や討伐方法についてはよく知られており、決して厄介な魔物というわけではない。
だが、これだけの数を相手にするとなれば話は別だ。

その数、ゆうに５００体。
街にいる冒険者を全てかき集めたとしても、なお分の悪い戦いであった。
加えて――
「ブオオオオオオオオオッ！」
オークの群れの最後尾からすさまじい雄叫びが轟いた。
並みのオークより一回りも二回りも巨大な怪物の姿がそこにあった。
この大群を率いるボス、オークキングである。
危険度Ａに相当するこの魔物は、単体でも街一つを破壊せしめる力を持っていた。
「あいつは何やってんだよ……」
誰かが呟いた。
その声を聞いて、さらに別の冒険者が憤激したように叫ぶ。
「どうせ怖くなって逃げやがったんだろ！　本当はＣランクに見合う実力なんてなかったんだよ！」
「そんなことないよっ！」
「そうですよ！　師匠は絶対来てくれますよ！」
中には反論する者もいたが、大半は臆病風に吹かれたのだと揶揄する声である。

彼らの脳裏に等しく浮かんでいるのは、とある人物。
新人冒険者とは思えない驚異的な討伐実績を残し、デビューからたったの1カ月で上級冒険者にまで上り詰めた規格外の男――
「レイジくん……」
誰かがその名を呟いた、まさにその時である。
オークの群れ目がけ、空の彼方から一人の青年が降ってきたのは。

1章　女神殺して邪神になった（らしい）

気が付いたら草原に座っていた。
見渡す限りの緑。空は青く澄んでいて、頬を撫でる微風が気持ちいい。
何とものどかな光景だが、俺は一体なぜこんなところにいるのだろうか。
いや、そもそも俺は何者なんだ？
俺の名前は……レイジ。漢字は……分からない。
苗字は……思い出せない。
高いビルに囲まれた大都市に住んでいた……ような気がする。
家はマンションだった……ような気がする。
両親と妹がいた……ような気がする。
記憶がかなり曖昧（あいまい）だった。
マズイな。どうしたらいいんだ？
取りあえず立ち上がってみるが、周囲には人も家も見当たらない。当然、交番があるはずもない。

『あっ、目が覚めたみたいだね～ｻﾝｷｭｰ』
その時、どこからともなく声が聞こえてきた。
しかし辺りを見渡してみても誰もいない。
「誰だ？」
『超絶美少女天使のハルエルちゃんで～す☆（ゝω・）ｖｷｬﾋﾟ。これからよろしくねッ☆』
「……は？　頭大丈夫か？」
『ちょ、いきなり失礼な反応やめてよぉﾋﾄﾞｲｰ』
プンスカと怒ったような声が返ってきたが、天使とかマジで意味が分からん。しかも自分で超絶美少女とか、正直かなり痛い。
『あ、何よ何よ、その疑いの目はー。ハルエルちゃん、マジもんの天使だってばーｻﾝﾏﾀﾞｷﾞ』
「本当なら姿を見せろ。そもそもどこに隠れてやがる？」
『隠れてるんじゃなくて、天界から念話で話しかけてるんですぅ～。あと、制約があるので、残念ながらそっちに行くことはできませーんｻｷﾞｰ』
「そうか。で、その自称天使が何の用だ？」
こいつの正体についてはひとまず置いておいて、とっとと話を進めることにした。ウザイし。
天使云々（うんぬん）は信じられないが、俺の記憶喪失の原因や、なぜこんなところにいるのかについて

情報を得られるかもしれない。
『だから本当だってば～。まぁ、信じられないのも無理ないけどね。だって君、前世の記憶を失ってるようだしﾌｻｰ』
聞き捨てならない言葉が出てきた。
「おい、前世ってどういうことだ？」
『実は君、死んじゃったんだよね～♪　ﾅﾝﾏﾝﾀﾞﾌﾞ』
めちゃくちゃ嬉しそうに言われたんだが……。
てか、ナンマンダブは天使が言うことじゃないだろ。
「つまり、俺は異世界転生したというわけか」
『ザッツラ～イト！』
なぜかは分からないが、俺は自分が発した異世界転生という言葉で、今置かれている状況をなんとなく理解できた。そのお陰か、ほとんど動揺していない。
「何で記憶を失ってるんだ？」
『いやぁ、実は少しばかり込み入った事情があってさ～』
「どういうことだ？」
『その前にまず、こっちを見てちょーだいね。え～いﾃﾞﾃﾞﾝ』

不意に目の前の空間に文字が浮かび上がってきた。
「何だ、これ？」
『君のステータスだよ！　簡易版だけどねぐぐぐぐーん』
ステータス！
その言葉に俺はちょっとときめいた。
ゲームのことはおぼろげながら記憶に残っていた。どうやらかなり好きだったらしい。具体的なタイトル名とか、ストーリーとかは忘れてしまっているものの、映像なら思い出すことができる。

レイジ
種族：人間族（ヒューマン）（邪神）
レベル：1
神スキル：〈神眼〉〈神智〉〈献物納受（けんもつのうじゅ）〉〈賜物授与（たまものじゅよ）〉
固有スキル〈死者簒奪（さんだつ）〉
称号：大罪人

「おい、人間なのに邪神ってどういうことだ？　しかも称号が大罪人って……」
『実は君さ～、転生を担当した女神様を殺しちゃったんだよねｻｯﾍﾟｰ』
「……は？」
あまりにあっさりと告げられた衝撃的な言葉に、俺は思わず口をポカンと開けてしまった。
自称天使は相変わらず軽い口調で話を続ける。
『ちょうど男神に失恋した女神様が、悲嘆にくれる日々を送ってた時だったんだよねー。そこに死んだばかりの君がやってきて、女神様にこう言ったんだ――

――うっわ、ぶっさwwwwwwwwwwwwww』

「言ってねぇよ!?　しかも草生やし過ぎだろ！」
俺は即座に反論した。
『言ったよ！　すぐ近くでハルエルちゃん聞いてたもんね～。それで悲しみのあまり、女神様は死んでしまいましたとさﾁｬﾝﾁｬﾝ。まぁ、そのせいで今はハルエルちゃんが代役を務めているんですよﾒﾝﾄﾞｸｻｰ』
「そんなことで死ぬとか、どんだけメンタル弱いんだよ、その女神!?」

『いやいや、実は前々から気にしてたからさー。だけど高位の女神様だったし、周りも気を遣って本当のことは言わないじゃん？　むしろ、そんなことないですよ、美人です！って騙されて。それで自信満々で男神に告白したんだけど、呆気なく玉砕。そんな直後にはっきり不細工なんて言われたら、死んでもおかしくないってばカワイソー』

俺は本当にそんなことを言ったのか……？

くそ……記憶がないせいで分からない。

『で、問題は君が前世から持ってたその〈死者簒奪〉っていうスキルでさー。それ、殺した相手から能力を奪うものなんだけど、女神様を殺したせいで女神様の能力の一部が君のものになっちゃったんだよねーメンゴ』

そして俺は人間の身でありながら、神格を得てしまったらしい。

だが神殺しは大罪。

故に邪神。

『記憶喪失はその副作用みたいなものだねゴメンゴーキヤ。人間の魂に対して、神様が持っている力は大き過ぎるからさー』

「それで、俺はこれからどうなるんだ？」

神殺しが大罪だというのなら、俺は裁かれるのかもしれない。他の神とかに。

しかし、自称天使はからからと笑って、
『バレたら確かにまずいかもだけど、心配はいらないよー。どうせ神様たちなんて自分のことにしか興味ないし、気が付かないって』
「ずいぶんとテキトーだな」
『相手が美神ならともかく、超絶不細工神だったらなおさらねｹﾞﾗｹﾞﾗｷﾞｬｸﾀﾞｰ。もちろん、ハルエルちゃんも誰にも言わないから大丈夫！　むしろ性格まで不細工なクソ女神だったし、殺してくれてマジ感ｻﾝｹﾞｻﾝ』
……どうやら、死んだ女神は部下に嫌われていたらしい。
『それでも心配だったら、誰も逆らうことができないくらい強くなっちゃえばいいんだよー』
「強く？」
『そそ。神様は信者が多ければ多いほど強大になれるんだよ。……おっと、もうこんな時間じゃないか！　ごっめんね～、ハルエルちゃんってば、今日はこれから合コンなんだ！　ふっふっふっ、今回こそいい男天使捕まえちゃうぞ～☆』
「おい待てよ、まだ聞きたいことがあるんだ。この世界はどんなところで、今俺がいる場所は――」
『詳しいことは〈神智〉を使えば分かると思うから！　じゃあね～ﾊﾞｲﾊﾞｲｷｰﾝ』

ぷつん。
どうやら念話とやらを切ってしまったらしい。その後、何度呼びかけても自称天使からの返事はなかった。
ロクな説明もないまま見知らぬ世界に放り出された俺は、しばし呆然とその場に立ち尽くす。
やがて、ぽつりと誰にともなく呟いた。
「……天使が合コンするのか……」
ハルエルとかいう自称天使（本当に天使なのか、俺はいまだに半信半疑である）に教えてもらった通り、〈神智〉というスキルを使ってみることにした。
次の瞬間、俺の脳内に大量の情報が流れ込んできた。
「っ!?」
ちょ、何だよこれは!?
ひどい眩暈が襲ってきて、俺はその場に蹲ってしまう。
やがてゆっくりと眩暈が治まってきた頃、俺は〈神智〉スキルの内容を概ね理解していた。

Q：〈神智〉ってどんなスキル？

A：《神智図書館》にアクセスすることを可能にするスキル。

Q：《神智図書館》って何？

A：神々の叡智（えいち）を集めた図書館。

どうやら先ほど俺は、その図書館にある膨大な知識を一度に閲覧しようとしたらしい。だがそれは人間の脳で処理できる量ではない。

いろいろと試してみて、どうにか必要な知識だけを選んで見ることができるようになった。

ってか、使い方くらい教えておけよ、あのクソ天使。

しかし情報を探すのに結構手間がかかるな、これ。

図書館だけあって、きちんと整理されてはいるようなのだが、慣れるまでは探すのが面倒そうだ。検索機能が欲しい。

Q：ここはどこ？

A：……。

Q：この近くに街とかない？

A：……。

現在地に関する情報は調べても見つからない。考えてみたら、そんな個人の情報が《神智図書館》とやらにあるはずないもんな。

そこでふと思い立って、俺は地面に目を凝らしてみる。すると視界の端に、先ほどのステータスと同じような文字が浮かび上がった。

・地面

見れば分かる……。

が、これこそが〈神眼〉というスキルの能力に違いない。

再び〈神智〉を使ってみる。えーっと、「スキル」に関する情報は、確か、こっちの方に……。

お、あったあった。

Q：〈神眼〉ってどんなスキル？

A：神の目で対象を見ることが可能になるスキル。〈鑑定〉〈鷹の眼〉などのスキルを内包。

ふむふむ、なるほど。

つまり俺は今、大地を〈鑑定〉したということなのだろう。
続いて、目を瞑って意識を空へと向けてみる。すると、上空から地上を俯瞰（ふかん）するような映像が脳内に流れ込んできた。
これが〈鷹の眼〉の能力だな。
お陰で、北西の方角に街らしきものを発見することができた。
〈鷹の眼〉を使いつつ、その街を〈鑑定〉してみた。

・ファースの街

街の名前が分かったぞ。
ここで今度は〈神智〉の出番だ。

Q：ファースの街って？
A：シルステル王国南東部にある都市。人口約３０００人。

さすがは神スキル。〈神眼〉と〈神智〉の２つを併用すれば、たいていのことは分かりそうだ。

取りあえず俺は、ファースという街に向かって歩くことにした。
上から見た限り、間に丘や森なんかもあったので、それなりに距離がありそうだ。
「っ……あれは……」
その途中のことだった。
高さ50㎝くらいの青い塊を発見し、俺は足を止めた。

種族：スライム
レベル：2
防御系スキル：〈物攻耐性〉
身体系スキル：〈自己修復〉

第一モンスター発見！
しかもゲームではお馴染みの最弱モンスターだった。
レベル2だし、異世界に転生して初めての戦闘としてはおそらく適当な相手だろう。
ただ〈物攻耐性〉っていうスキル持ちなのに対し、こっちは素手だ。そして、どこにでもあるような布の服。せめて簡単な武器くらいサービスしてほしかった。

まぁ、ない物ねだりをしても仕方ない。幸い、まだこちらには気付いていない様子なので、俺は背後から気配を殺して近づいていった。

よし、今だ。

俺は覚悟を決めて全力ダッシュ。その勢いのまま思いきりジャンプし、スライムに渾身（こんしん）の飛び蹴りを見舞った。

結論から言うと、スライムは雑魚だった。

俺の先制攻撃でほぼ瀕死状態になり、〈自己修復〉する間もなく追撃によって絶命した。

スライムは死ぬと形状を保てなくなるらしく、どろどろに溶けてしまった。

そんな中、小さな球形のものだけが残った。

「何だこれは？」

・粘性生物の目玉

Q：粘性生物の目玉って？

A：粘性生物が時々落とすドロップアイテム。稀少度コモン（普通）

大した価値はなさそうだが、一応拾っておくことにした。換金できるかもしれない。

「新しいスキルが加わってるな」

ステータスを確認してみると、スライムが持っていた2つのスキルが追加されていた。たぶん〈死者簒奪〉というスキルのお陰だろう。

Q：〈死者簒奪〉って？

A：殺した生物が持っていたスキルを奪うスキル。

あの自称天使によれば、このスキルこそ、俺が神の力を手にしてしまった原因である。

〈自己修復〉の効果を確かめようと、俺はワザと転んでみた。

擦りむいた膝をじっと見ていると、ゆっくりとではあるが、確実に自然治癒以上の速さで治っていく。10分もすれば傷は跡形もなくなっていた。

どうやら人間でもちゃんと機能するスキルらしい。魔法のようにすぐに回復するわけではないが、この効果はありがたい。

その後も俺は何度かスライムに遭遇したが、危なげなく倒すことができた。
いずれのスライムも〈物攻耐性〉〈自己修復〉のスキルしか持っていなかったため、新しく加わったスキルはない。
5匹くらい倒したところで、レベルが2に上がった。レベルアップ効果か、少し身体が軽くなった気がした。
「おっ、緑色のスライムがいる」

Q：グリーンスライムって？
A：スライムの亜種。スライムより数が少ない。

少しだけ稀少種らしい。
強さはスライムと大差なく、倒すと〈突進〉というスキルが手に入った。
「……森だ」
それから2時間くらい歩いた頃、目の前に森が現れた。

・ファース南の森

Q：ファース南の森って？

A：ファースの南にある森。ゴブリンが棲息している。

「ゴブリンか……まぁ、なんとかなるだろ」

森を迂回するという手もあるが、俺はあえて真っ直ぐ森を突っ切ることにした。

ゴブリンを倒せば、新しいスキルが手に入るかもしれないしな。それに可能な限り早くレベルを上げておきたい。

2章　異世界行ったら奴隷買う

ファースという街が見えてきたのは、すっかり日が傾いた夕暮れ時だった。
中世ヨーロッパ風の街並みが赤く染まっている。
「思ったより時間がかかってしまったな」
というのも、森の中でちょっとゴブリン狩りに精を出し過ぎたせいだ。
〈神智〉が教えてくれた通り、あの森には多くのゴブリンが棲息していた。
最初は素手だったので苦労したが、1体目を倒してからはだいぶ楽になった。〈剣技〉スキルと武器が手に入ったからだ。

・錆びついた剣

ないよりはマシという程度の武器だけどな。
中にはホブゴブリンという、ゴブリンの亜種もいた。こいつは普通のゴブリンより二回りほど身体がでかく、〈怪力〉という身体系スキルを持っていた。ちょっと苦戦したが、どうにか

倒すことができた。動きが鈍重だったのが幸いしたのだろう。

・棍棒

ホブゴブリンが使っていた棍棒も入手できた。結構重いはずなのだが、〈怪力〉のスキルを獲得したせいか、片手で振り回すことができる。

森を出る頃には、レベルが4まで上昇していた。また、〈逃げ足〉〈木登り〉〈毒耐性〉など、ゴブリンが持っていたスキルを新たに獲得できた。

ファースの街に辿(たど)り着いた俺は、取りあえず手に入れたアイテムを換金することにした。なにせ無一文だしな。

ドロップアイテムは持てるだけ持ってきたので、かなり重い。アイテムを無限収納できるような袋が欲しいな。あるかどうか分からないが。

・冒険者ギルド

街に入ってすぐの所にあった建物を見た時、俺の〈神眼〉がそう教えてくれた。

おそらくは前世の知識だろうが、俺はすぐにそれがどんな場所なのか理解できた。ここならアイテムを買い取ってくれそうだ。

ギルド内では、人の出入りが激しいからか、俺のことなど誰も見向きもしない。

ざっと見渡してみると、いかにも冒険者といった暑苦しい感じの男たちが大部分を占めていたが、意外と女性の姿も多かった。

俺は受付に行き、買い取り希望だと伝える。ギルドに所属する冒険者なら高値で買い取ってくれるというので、ついでに冒険者登録もしておくことにした。

しかし、やはり大した金額にはならなかった。

ゴブリンが落とした剣や槍はそれぞれ銅貨10枚、棍棒は銅貨50枚、粘性生物の目玉は銅貨30枚だった。

合計して、今日の儲けは銅貨２８０枚。

平均的な1食の代金が銅貨50～70枚くらいらしいので、5食分くらいはありそうだ。ただし、宿に泊まるお金も必要となる。

ちなみにこの世界の貨幣だが、銅貨１００枚で銀貨1枚、銀貨１００枚で金貨1枚に相当するらしい。

銅貨は10円、銀貨は１０００円、金貨は10万円と考えれば、分かりやすいかもしれない。円

っていうのは、たぶん俺の前世の通貨単位だ。これは記憶に残っていた。
「ゴブリンの討伐ですと、1体につき銀貨1枚になります。ホブゴブリンは銀貨3枚です」
どうやら登録してから討伐していれば、報酬をもらえたらしい。今さら遅いが。
依頼を受けて成功すれば、報酬を得ることができる。ただ、登録したての俺は冒険者ランクが低い。ランクの高い仕事は優先的に上級冒険者が持っていくため、大した依頼を受けることはできそうになかった。
地道にゴブリンを倒している方が儲かりそうだ。
ところで、俺には〈神眼〉があるため魔物の種族を知ることができるが、通常はそんなことは不可能だ。
ではどうやって魔物を判別するのかというと、知識である。
例えばゴブリンは種族によって耳の形が異なるため、それで見極めることもあるらしい。
討伐したら、部位を持ち帰るなどして証明しなければならない。簡単な判別法がないような魔物の場合、丸ごと持ち帰ることもあるようだ。
冒険者登録を終え、ギルド証を受け取った俺は、今夜の寝床を探す。
何軒かの宿に当たったが、安いところでも食事なしで1泊銀貨2枚だった。つまりは銅貨2

００枚だ。残りは銅貨80枚。懐は寂しくなるが仕方がない。
また明日、魔物を倒して稼ぐことにしよう。

◆◇◆◇◆

翌日から俺は、せっせと森に足を運び、ゴブリンの討伐に精を出した。
もはやゴブリン程度、俺の相手ではない。ホブゴブリンも余裕で倒せる。単純にレベルが上がり、武器を手にしたというだけでは、こうはいかないだろう。〈死者簒奪〉で得た〈剣技〉や〈怪力〉などのスキルによるアシストの影響が大きいはずだ。
稼いだ金で、ちゃんとした武器を揃えることができた。

・鋼の剣：量産品。稀少度コモン
・革の鎧：量産品。稀少度コモン

実はゴブリン討伐の報酬以上に、森に生えている薬草の採取がいい稼ぎになった。

・薬草：ポーションなど治療薬の原料になる
・赤い薬草：薬草より稀少。ポーションなど治療薬の原料になる

薬草は1束（２００ｇくらい）で銀貨3枚、赤い薬草は1束で銀貨10枚に換金できた。
どうやら薬草の見極めは専門的な知識がないとできないらしく、そのため高値で買い取ってもらえたのである。
しかし〈神眼〉がある俺にとっては、薬草の見極めなど朝飯前だった。
「よし。そこそこ金が貯まったな」
1週間で金貨3枚と銀貨30枚を稼いだ俺は、ある場所へと足を運んだ。
奴隷商館だ。
もちろん奴隷を買うためである。
もっとも今の所持金では厳しいかもしれないが、大よその相場を確かめておきたかった。
「いらっしゃいませ」
街の裏通りにある商館に入ると、小太りの男性店員が出迎えてくれた。
ただし身なりはよい。商館の内装も豪華で、結構儲かっているようだ。

「奴隷を見にきた」
「お客様は冒険者でございますか？」
「そうだ」
「では、戦闘用の奴隷をお買い求めで？」
「ああ。だが戦闘用に限らず、できる限りたくさん見せてほしい」
「かしこまりました」
店員の案内で奥の部屋へと通される。
と、その時だった。
「おい、とっとと歩け」
「……」
小柄な少女が、追い立てられるように歩かされていた。体調が悪いのか、ふらふらしている。
横顔しか見えないが、顔色もかなり悪いようだ。
俺は〈神眼〉で彼女のステータスを見た。

ニーナ
種族：ドワーフ族

レベル：2
技術系スキル：〈採掘＋1〉
称号：奴隷
状態：病気（深刻）

ドワーフ族か。レベルも低いな。
深刻な状態異常にもかかっているようだ。
「あの奴隷は？」
「え？　ああ、はい。あれはこれから処分する予定でして」
「処分？」
「ええ。実はひどい病気に罹（かか）ってしまいましてね」
「治療はしてやらないのか？」
「してやりたいのは山々なのですが、治療にはハイポーションが必要だと診断されたのです」

Q：ハイポーションって？
A：ポーションより効果の高い治療薬。大抵の傷や病気を治すことが可能。

当然ながら、1本当たり銀貨10枚もするポーションより、さらに高価らしい。
「あれは売れ残りでして」
つまり治療してやるほどの価値もないということか。
店員が当然のような顔をしているのを見るに、商品にならない奴隷を処分するというのは、この世界では普通の価値観なのだろう。
そもそもドワーフの奴隷は、あまり人気がないらしい。
鍛冶や採掘などの能力は高いが、奴隷にそれを期待する者は稀だ。大人になっても身体つきは子供のままなので、性奴隷としての価値も低いし、戦うのも得意ではない。
ふと、その少女と目が合った。
絶望を通り越し、もはや諦観（ていかん）し切った瞳。おそらくこれから自分が辿る運命を知っているのだろう。
さて、どうするか。

①「ふーん……」自分には関係のない話なので放置する。
②「処分するなんてひどいじゃないか」店員を非人道的だと非難する。

③「彼女を買おう」あの奴隷を買う。

俺の頭に3つの選択肢が浮かんだ。

悩むまでもなく、俺はそのうちの一つを選択する。

「ハイポーションは置いてあるか？　俺が金を出すから、彼女に飲ませてやってくれ」

「えっ？　ですが……」

「彼女を買おう」

ハイポーションは金貨1枚。

そして少女の値段も金貨1枚だった。

これでは、ハイポーションを使うと店にはなんの利益も出なくなる。

「しかし本当によろしいのですか？　お客様が望まれる戦闘用として、あまり適当な種族ではありません。力は人間族より少し強いですが」

「問題ない。それより早く薬を持ってきてくれ」

俺は金貨2枚を手渡した。

店員が下男らしき男にハイポーションを取りに行かせる。

「……？」
ドワーフの少女が俺の前へと連れて来られた。状況が分かっていないのか、不思議そうな顔をしていた。
俺はハイポーションを少女に渡した。
「ハイポーションだ。これでお前の病気は治る」
「あの……ニーナを、助けてくれるのです……？」
「ああ」
「ど、どうしてなのです……？」
「俺がお前を買ったからだ。せっかく買った奴隷を死なせるわけにはいかない」
「……」
不思議そうな顔をしつつも、少女――ニーナはハイポーションを飲み干した。
効果が出るまでしばらくかかるらしいので、その間に俺は他の奴隷も見せてもらうことにした。
戦闘用の奴隷らしく、いかにも屈強そうな者たちがずらりと並んでいる。
大半は男だが、女も少なくない。この世界では、戦闘能力において必ずしも女が男に劣るというわけではないらしい。

店員が資料を見せてくれるが、そこに載っている情報は「剣術が得意」とか「元傭兵」だとか、かなりざっくりとしたものだけだった。
俺には〈神眼〉があるので、それで全員のステータスを見ていった。
そんな中、一人の少女が目に留まった。
綺麗な白銀の髪に、怖ろしく端整な顔立ち。しかしどこか眠そうな目をしている。年齢は15～16歳くらいだろうか。
特筆すべきは、頭のてっぺんに獣耳が付いていることだろう。もふもふしたい。

ファン
種族：犬人族
レベル：23
武技系スキル：〈剣技＋3〉〈二刀流＋3〉〈体術＋1〉
戦闘補助スキル：〈闘気〉
身体系スキル：〈俊敏＋2〉〈嗅覚＋2〉
称号：奴隷　英雄の卵

やっぱり獣人だ。しかしまだ10代だろうに、結構レベルが高い。
＋2とか＋3というのは、スキルが熟達していけば付くものらしい。だが、そう簡単に熟達するものではないようで、あそこまで成長しているのは、彼女のような年齢では珍しい。才能があるということだろう。
〈二刀流〉や〈闘気〉といったスキルにもそそられるが、何より注目すべきは「英雄の卵」という称号だな。

Q：称号の「英雄の卵」って？
A：英雄に成り得る器の持ち主。経験値や熟練値が入りやすいなど、さまざまな補助効果がある。

未来の英雄か。
これはぜひとも手に入れたいな。
「お客様、お目が高いですね。犬人族は忠誠心の強い種族で、身体能力も高い。そのため戦闘用の奴隷として非常に人気があります」
「彼女の値段は？」

「金貨40枚です」
……高い。とてもじゃないが足りない。
聞いてみると、戦闘用の奴隷はそもそも高価なものらしい。加えてこの見た目だ。この店の商品の中でも1、2を争う高額商品のようだ。
ニーナを買った俺には、金貨1枚と銀貨30枚の残金しかない。いや、ニーナを買っていなくても足りなかった。まぁ分かっていたことだが。
だが、どうしても彼女は欲しい。
「金貨50枚出そう。その代わり1週間待ってくれないか？　今やっている依頼を無事に終わらせることができれば、ちょうど金貨50枚が入ってくるんだ」
嘘です。そんな依頼受けていません。
俺の提案に、店員はしばし迷う素振りを見せた。だが先ほど1人購入したこともあって、信頼できる客だと判断したのか、最後は頷(うなず)いてくれた。
元の部屋に戻ると、ニーナが迎えてくれた。随分と顔色がよくなっている。ハイポーションが効いたようだ。
こうして元気になった姿を見ると、くりくりした目が可愛らしい、なかなかの美少女だった。
ちなみに見た目は10歳くらいだが、実年齢は15歳だという。

「ご、ご主人さまっ……これから、よろしくお願いしますなのですっ」
ぺこりと頭を下げてくる。
「俺はレイジだ。こちらとしてもよろしく頼む」
俺はできる限り優しい笑顔を浮かべつつ、彼女を〈神眼〉で見た。

ニーナ
信仰度：0％ → 50％

……くくく。
口端が自然に吊り上がり、思わず笑みが零れてしまう。
どうやら俺の選択は間違っていなかったようだな。
信仰度というのは、俺に対する信仰の度合いのことだ。分かりにくければ、恋愛シミュレーションゲームの好感度みたいなものと考えてくれたらいい。
神の力を持つ俺にとって、この信仰度は重要だ。
これは、俺が持つスキル〈献物納受〉が大いに関係している。

Q：〈献物納受〉って？

A：信者が自らの力で得た経験値の一部を獲得できる、神固有のスキル

Q：経験値の一部って、具体的にはどれくらい？

A：獲得経験値×信仰度

例えばニーナが１００の経験値を得たとしよう。すると現在、信仰度が50％なので、50の経験値が俺に入るということになる。もちろんニーナに入る経験値は１００のままだ。

つまり俺は、信者を増やせば増やすほど、強くなることができるわけだ。

ここはおそらく前世よりも危険な世界。魔物がいるくらいだしな。だから可能な限り強くなっておくべきだろう。

それに、あのクソ天使は心配いらないと言っていたが、いつ他の神たちに神殺しのことを知られてしまうか分からない。

「ご主人さまは戦闘用の奴隷を探していたと聞いたのです。でもニーナは、戦いの経験がないし、ドワーフなのです。……それなのに、どうしてニーナを買ってくれたのです？」

「そうだな……」

①「実は俺、ロリコンなんだ」真剣な顔で。
②「ただの気紛れだ」ぶっきら棒に。
③「処分されると聞いて、つい助けてしまったんだ。元気になってよかったよ」

①は論外だろ。信仰度が0になっても不思議じゃない。下がることもあるのだ。
②もダメだな。なにカッコつけてんだ。そういうキャラが受けるのは乙女ゲームの世界だけだ。
「処分されると聞いて、つい助けてしまったんだ。元気になってよかったよ」
「……ご主人さまは優しい人なのです」

ニーナ
信仰度：50％　→　55％

おっ、さらに信仰度が上昇した。
ふっふっふ、チョロいもんだぜ。
死にかけているところを助けてやれば信仰度が上がるはずだという下心からなのだが、予想

通りだな。そんな打算的な思考など知らず、彼女は俺のことを完全に信じ切ってくれているようだ。
素直そうな子だし、最初の仲間としてはちょうどいいだろう。まずは彼女でいろいろと試してみることにしよう。
それにドワーフとはいえ、俺には彼女を即戦力にする方法がある。
もちろん俺のもう一つの神スキル、〈賜物授与〉を使うのである。

奴隷商館をあとにした俺は、ニーナを連れて武器屋へと向かっていた。
「どんな武器が使いやすい？　小柄だから短剣か？　いや、ドワーフは力が強いらしいし、斧がいいかもな。どうだ、ニーナ？」
「あの、もしかしてニーナも戦うです……？」
不安そうに聞いてくるニーナ。
「ああ。だが安心しろ。最初はせいぜいゴブリンだ」
「ご、ゴブリン……」
ニーナが顔を青くした。
「……たぶん、ニーナはゴブリンより弱いのです……」

「心配するな。ゴブリン程度、相手にならないくらい強くしてやる」
俺の持つ神スキル〈賜物授与〉は、自分の持つ経験値を信者に譲渡できるというものだ。
これを使えば、ニーナは戦わずしてレベルが上がる。俺自身のレベルは下がってしまうが、多少弱くなったところで、ゴブリンに後れを取ることはないだろう。
だが街中で俺の能力を使うのは避けた方がいいな。
俺は武器屋で斧と短剣を買い、合わせて銀貨30枚を支払った。
街の外に出て、周囲に誰もいないことを確認してから、俺は真剣な顔でニーナに向き直った。
「よし、ニーナ。これからすることは絶対に誰にも話すなよ」
「は、はいなのですっ……」
それから俺の能力について簡単に説明した。
「経験値、なのです……？」
ニーナは恐る恐る聞き返してきた。
どうやらステータスとか経験値とかスキルとか、そうした概念自体、彼女には理解できない様子だった。

Q：この世界でステータスって一般的？

A：一般的ではない。〈鑑定〉を使える者はごくごく稀少

〈鑑定〉というスキルは、俺の持つ〈神眼〉の下位互換だ。しかし、それを持つ者ですらほとんどいないのだとすれば、ステータスの存在が広まっていないのも当然といえた。

ただ、魔物を倒せば強くなるとか、繰り返し練習すれば技術が身につくとか、そうしたことは経験的に知られているらしい。

「ニーナ、頭が悪くてごめんなさいなのです……」

「いや、気にするな。難しい話をして悪かった」

俺はしょんぼりと項垂(うなだ)れるニーナの頭を撫(な)でてやった。

「はぅ……ご主人さまは、本当にお優しいのです……」

理解できなくても、実際に使ってみれば実感できるだろう。

俺は〈賜物授与〉で、ニーナに経験値の一部を譲渡した。

レイジ

レベルダウン：11 → 8

ニーナ
レベルアップ：2　→　7

俺のレベルは3下がり、逆にニーナのレベルは5上がった。
計算が合わないのは、レベルが低いとレベルアップに必要な経験値が少ないからだ。
少し身体が重くなったが、まぁほんの数日前まではこれよりずっと弱かったのだから、大した問題ではない。
ちなみに〈献物納受〉と違い、譲渡の際のレートは１００％だ。
「……急に力が湧いてきたのです……？」
レベルが2から7へと一気に上がったニーナは、目を丸くしている。
「これが俺の能力。俺が持っていた力の一部をニーナに渡したんだ」
「そ、そんなことができるのです……？」
「誰にも言うなよ」
「もちろんなのです！　ご主人さま、本当にすごいのです！」
ニーナがキラキラした瞳で俺を見上げてくる。

ニーナ
信仰度：55％　→　60％

また信仰度が上がったな。
そして俺たちはゴブリンの森へと向かうのだった。

「いたぞ。ゴブリンだ」
「っ……」
前方にゴブリンを発見した。
幸いなことに1体だけだ。最初の戦闘としてはちょうどいい。
ニーナは斧を構えた。
だがその手は震え、顔色は非常に悪い。
「大丈夫か？」
「だだだいじょうふなのでひゅ！」
どう見ても大丈夫じゃないな。

聞いてみると、ちょっとしたトラウマがあるらしい。
「……この街に連れて来られる途中、ゴブリンの群れに襲われたのです……。傭兵さんたちがどうにか追い払ってくれたのですが……一緒にいた奴隷が何人か犠牲になったのです……」
弱い魔物とはいえ、群れたゴブリンは脅威だ。それに身体の小さな彼女にとって、ゴブリンは自分より大きい。よほど怖かったのだろう。
むぅ、これはちょっとダメっぽいな。
俺は適当な大きさの石を何個か見つけ、ニーナに渡した。
「これは……？」
「投げるんだ。外れてもいいから」
いきなりの接近戦はハードルが高いと判断した俺は、ニーナに石を投擲（とうてき）させることにした。命中率はいざ知らず、当たればそれなりのダメージにはなるだろう。
「こっちに来たら俺が倒すから、安心して投げ続けろ」
「は、はいなのですっ」
ニーナは振りかぶって、ゴブリン目がけて思いきり石を投げた。
おっ、女の子にしては意外といいフォーム。
しかし、残念ながら石はゴブリンの脇を抜け、近くの木の幹に当たってしまった。

ゴブリンがこっちに気付き、向かってきた。
「気にするな。どんどん投げろ」
「は、はいなのですぅっ！」
俺が横で剣を構える中、ニーナは次々と石を投げていく。なかなか当たらない。だが5mほどまで近づいてきた時、ようやく1個がゴブリンの肩に当たった。
「グギャッ」
結構痛かったのか、ゴブリンが悲鳴を漏らす。
「あ、当たったのです！」
「よくやった」
俺は前に出た。ゴブリンがすぐに気付いてボロボロの剣を構えるが、遅い。
ゴブリンの心臓に俺の剣が突き刺さった。
「た、倒したのです！」
「どうだ、思ってたより弱いだろ？」
「ご主人さまが強いのです！」
それからもニーナには石を投げさせた。
俺がいれば安心だと思ってくれたのか、徐々に緊張が解(ほぐ)れていった。そのお陰か、石の命中

率が少し上がった。俺が投球フォームを指導したことも影響しているのかもしれない。
ゴブリンを10匹くらい倒した頃、俺のレベルが8から9になった。
それからも順調にゴブリンを狩っていく。
「また当たったのです！　投げるの楽しいのです！」
ある時から急にニーナの命中率が上がり、投げた石がかなり当たるようになってきた。嬉しそうに投擲する彼女のフォームも、ずいぶんと様になってきている。
「ん、ちょっと待て。これは……」

ニーナ
スキル獲得：〈投擲〉

いつの間にかニーナが新しいスキルを獲得していた。〈投擲〉だ。こんなに早く修得したのは、元から才能があったからかもしれないな。
「えいなのですっ！」
「グゲェ！」
ニーナが投げた石が急所に当たったらしく、一撃でゴブリンを仕留めてしまった。

「すごいのです！　ニーナでもゴブリンを倒せるのです！　これもご主人さまのお陰なのです！」

ニーナは無邪気に喜んでいる。

「いや、ニーナが頑張ったからだよ」

「でも、やっぱりご主人さまがいてくれたからなのです！」

ニーナ
信仰度：60％　→　65％

信仰度が上昇したようだ。

よし、ここまで上がれば、さすがにもう大丈夫だろう。

①「俺と結婚してくれ」
②「俺の友達になってくれ」
③「お前を奴隷から解放する」

①は、何でいきなりプロポーズしてんだよ。
②もダメだ。俺はぼっちか。いや、確かにこの世界ではぼっちなんだけど……。
「ニーナ」
「はいなのです？」
「お前を奴隷から解放する」

邪神無双

～邪神が黒い笑顔で人助けを始めたようです～

九頭七尾

イラスト 武藤此史

試し読みはここまで
続きは書籍版でお楽しみください

書籍情報はこちら

http://books.tugikuru.jp/detail_musou.html

ツギクルブックス